

わが心、高原にあり

野里征彦 著

『文藝』2021.10.3



本の泉社・1273円

のざと・いくひこ
44年生まれ。作家。著書に『ガジュマルの樹の下で』『母と子のメルヘン ショパンの鍵』ほか

この地で暮らして5カ月、久男は山里の文化こそが、〈山里の集落でひたむきに、懸命に命を燃やす人間たちの、かけがえない営み〉なのだと思感する。この地はたしかに僻地だけれども、〈懸命に命を燃やす人間たち〉の心に僻地はない。屋敷普請に使うヒノキを伐り

「ダダスコダー、ダダスコダー、ダー、ダダスコダー」の囃子声は、賢治が「種山ヶ原」で描いた〈剣舞〉と共鳴している。輪になって踊る4人の光景は、イメージが豊かで秀逸だ。この物語は、震災後文学としても見過ごせない佳編であり、賢治の愛読者にもぜひ目を通してほしい1冊である。なお、第23回長塚節文学賞短編小説部門大賞「鱒」が併載されている。

宮澤賢治が深い関心を寄せていた岩手県北上山地の種山ヶ原を舞台に、東日本大震災の被災者である新沼久男が、自死の失敗から立ち直るまでの物語だ。大船渡で漁師だった父と兄を大津波にさらわれ、2年後に母を亡くした久男は、高校時代に陶酔した賢治に誘われるかのよ

うに死に場所を求めて、種山高原で有名な住田町へ向かう。死に損なった久男は、鳴瀬耕に助けられる。クマに出逢うと「クマハイでねが。こらっ」と怒鳴り、サンショウウオには「ゴンベやーい」と呼びかける耕は、山里に暮らす老人だ。本職が木挽きである耕は、久

男を山仕事に連れだす。死の淵から一步を踏み出した久男は、パートナーと別れ、息子の圭祐と実家に戻ってきた佳乃や町の青年たちと、大船渡や高田の被災者を励ますために、長らく途絶えていた鹿踊りの復活に取り組む。

だす場面が圧巻だ。地震きをたてながらヒノキが倒れる。〈そくぞくするような自然との峻厳な切り結びと、それ故にこそ深い交歓〉を久男は体得する。物語の大詰め、久男と耕、佳乃、圭祐が、満天の星明かりに照らされた種山高原で、鹿踊りを繰り広げる。

評者 松木新 文芸評論家